

目次

カクテルパーティー

5

訳者あとがき 271

解説 横井 司 274

Enough to Kill a Horse
1955
by Elizabeth Ferrars

主要登場人物

- ファニー・ライナム……………元女優。アンティーク・ショップの店主
バジル・ライナム……………ファニーの夫。ロンドンの大学講師
クレア・フォーウッド……………ファニーの旧友。元女優で作家
キット・レイヴン……………ファニーの異母弟
ローラ・グリーンスレイド……………キットの婚約者。ジャーナリストで子持ちの未亡人
ジーン・グレゴリー……………ファニーの隣人で資産家
コリン・グレゴリー……………ジーンの夫
トム・モーデュ……………元教師。口が悪く、村の嫌われ者
ミニー・モーデュ……………トムの妻
スーザン・モーデュ……………トムとミニーの娘
サー・ピーター・ポルター……………元新聞社主。ファニーの店の顧客
マクリーン医師……………村に住む医師
マクリーン夫人……………マクリーン医師の妻
トールレス夫人……………村の居酒屋兼宿屋（ワゴナーズ）の店主

第一章

来客を知らせる店のドアの鈴が微かに耳に届き、週末の件について具体的に考えようとしていたファニー・ライナムは、その思考を遮られた。舌打ちしながら、沈み込んでいた肘掛け椅子から、どっしりした体を持ち上げる。いきなり膝から追いやられてしまった猫のマーティンは、床に滑り落ちて腹立たしそうに鳴いた。ドアへ向かう飼い主を訝しげな黄色い瞳で追うマーティンの傍らで、犬のスパイクが暖炉の前の敷物から頭をもたげ、一応は来客に気づいたと言いたげな、眠そうな声を上げた。ファニーは急ぐ様子もなく、テーブルの脇に立ち止まって煙草をもみ消すと、鏡の前でもう一度足を止めて、白くなりかけてきた、ボサボサの短い髪を手早く撫でつけた。金縁の枠で飾られた鏡は年代物の貴重な品で、ひびの入った、くすんだ厚いガラスの奥に映し出された彼女の顔からは、血色がことごとく消し去られている。近眼の瞳は、どこか虚ろで陰険な目つきに映り、肉づきのいいがっしりした顎は、やけに長く、やつれて見える。鏡の中のそんな自分の姿を目にしても、ファニーは特に気にならなかった。

店へつながる廊下をゆつくりと歩きますと、緩みきったフェルトのスリッパが、石でできた床でパタパタと音をたてた。二年前にはびっこりだったスラックスが、今ではウエストのボタンをはめるのもやっとの状態だった。上に着ているのは、形の崩れたセーターだ。再婚した二番目の夫、バジル・

ライナムのためにファニーが自分で編んだものなのだが、やはり自分が着ようと借りることにしたとき、バジルは一言も嫌だとは言わなかった。ハイネックの襟元は、上質なヴィクトリア朝の小粒真珠のネックレスで飾られている。ファニーは背丈がやや低く、五十歳で、動きの緩慢な女性だった。しかも、このときは、ほんやりとして何か考え事をしているようだった。

「いらつしゃいませ」店に入るなり、彼女は機械的に決まり文句を口にした。

店内には、陽の光が燦々^{さんさん}と降り注いでいた。村の通りに面した細い窓から入る陽射しが、テーブルの艶やかな表面や、背の高い少年の像、書き物机、彫刻の施されたたんすの上の埃^{ほこり}を照らし出している。空中いっぱいには漂う埃までが、はつきりと浮かび上がって見えた。

毛皮のコートと小さな帽子を身に着けた女性客が、棚にあった錫製^{すず}の蓋付き^{ふた}ジヨッキを取って、手袋をはめた手の中で引っくり返していた。

営業用の笑顔を作って近づきながら、ファニーは声をかけた。「そのマグ、すてきでしょう？ お目が高いですわ。あとの二つは複製品ですから」

「おいくらですか？」と、女性が尋ねた。

「確か三〇シリングだったかと。ちょっと、見せてくださいいね。ええ、やっぱり三〇シリングです。本当はセットなんですけど、うちでは、ばら売りにしてるんですよ」

「イニシャルが入っているのね。できれば、ないほうがいいわ」

「取るのをお安いご用ですよ。五シリングほどいただければ、二、三日でできます」

「二、三日も、いられませんの。車で通りかかっただけですから」と、女性は言った。

「ご配送も承りますけど」

「いえ、それには及びませんわ。あちらの小さな磁器の水差しは、おいくらかしら？」

この質問こそ、女性が店に足を踏み入れた理由だと、ファニーはピンときた。

「ああ、あれですか。あちらは、少しお高くなります。何しろ、正真正銘のチエルシー焼きなもので」

「おいくら？」

「六ポンドです」

すると、女性客は素っ頓狂な笑い声を上げ、別の小物の値段を一つ、二つ尋ねてから、この時期にしてはいいお天気ですわね、と話をそらし、店を出て行った。

もともと売れるとは期待していなかったし、朝からずっと気になっていることがどうしても頭から離れずにいたファニーは、くるりと向きを変えて、石敷きの廊下を居間へと戻っていった。

居間は、天井の低い広々とした部屋で、片側の壁のほとんどを大きな暖炉が占領していた。暖炉には、すぐにでも火がつけられるように薪がセットされていたが、このとき部屋を暖めていたのは、電気ヒーターだけだった。ヒーターは、先ほどまでファニーが座っていた椅子のそばに置いてあり、椅子の上には猫のマーティンが陣取っている。石造りの床の大部分は濃いグレーの絨毯で覆われ、安楽椅子がいくつつかと横長の書棚が置かれていて、壁には、鳥や花を描いた何点かの古い版画と、金縁の鏡が掛かっている。

いつものようにファニーは、鏡の前を通りながら、暗い淵から浮かび上がってこちらを見つめ返している溺死体のような奇妙な顔に、ちらりと目をやった。それから部屋を横切って、深めの出窓になっている小さな窓辺へ行き、スイセンの花をいっぱいに差したスポード焼きの鉢の隣に立ててある写

真に見入った。その写真は三日前からそこにあるのだが、ファニーは、いまだにそれをどう捉えればいいのか判断に迷っていた。

気取って写っている写真から、いったい何がわかるだろう。写真は、絶大な説得力のある嘘を平気でつけるものだ。どんな絵画よりも巧みに人をだますことができる。

幸か不幸か、ファニーはその朝、友人のクレア・フォーウッドに電話をしなければならず、答えのない問いに悩まされながら写真を見ている暇は、そうはなかった。朝食後すぐにかけるつもりでいたのだが、つい、煙草を立て続けに吸って物思いにふけてしまっていた。先ほどの店の鈴に呼び覚まされてわれに戻ったファニーは、すでにかなり遅くなっていることに驚いた。不安げなため息をつけて窓から離れ、マーティンを追いやって椅子に座ると、まず煙草に手を伸ばし、それから受話器を取った。

ハムステッドに住むクレアの番号を押す。応答を待っている間、猫がしきりに喉を鳴らしながらファニーの膝に跳び乗り、居心地のいい位置を探そうと、ぐるぐる動きまわった。いささか頭にきたファニーは、猫を膝から押しやった。窓枠の写真から意識的に目をそらし、代わりに鉛筆と使い古しの封筒を取り出して、丸や四角を描きだした。

ほどなく、電話口から冷淡な声が返ってきた。とげとげしさを含んだ声だ。クレア・フォーウッドは、執筆をしている午前中に電話を鳴らされることを毛嫌いしているのだった。

ファニーが切りだした。「例のポルターさんのことだけどね、クレア……」

とたんに、クレア・フォーウッドの声から苛立ちが消えた。

「どうしたの?」と、たたみかけるように訊く。

「あなたのために、段取りしたわよ。土曜日に、カクテルパーティーに来てくれることになったの。まだ会いたいと思ってるのなら、週末にこっちへ来てくれさえすればいいわ」

「いったい、どうやったの？」と、クレアが尋ねた。

「昨日、彼が店に来たのよ。私が二年も抱え込んでた、たいしたことないコーナー用の食器棚を買ってくれてね。ちよつと話をしたの。木食い虫へのいい対処法がないか、知りたかったみたい。そのうちに話が弾んだから、思いきってパーティーに招待してみたつてわけ。とても喜んでくれたところを見ると、前からそういうことを望んでいたんだと思うわ。今度の週末、来られそう？」

「ええ、もちろんよ。どうもありがとう、ファニー。ただ、何となく……」クレアの声が再び変化し、ためらいがちで、慎重な口ぶりになった。「彼に会ってみたってあなたに話してから、ずっと考えていたんだけど、やっぱり、何だかばかげたことなんじゃないかって気もするの。ほら、私って、かなりの人見知りだから」

「つまり、もう会いたくなくなつたつてこと？」と、ファニーが訊いた。

「いいえ、会いたいわ。ただ、いざとなると、ちよつと不安になつて——私がどういう性格か、よく知っているでしょう？」

「いいこと？」と、ファニーは論じた。「私がポールターさんを誘つたのは、あなたが会いたつて言つたからなのよ」

「わかつてるわ。でも、自分でもまさか、本当に実現してもらえろとは期待していなかつたんだと思うの」

「お返しと言つたら何だけど、私のほうも、あなたにやつてもらいたいことがあるのよ。だから、今

さらやめるなんて言わないで」と、ファニーは語気を強めた。「実は、キットが突然、婚約してね。相手の女性にはまだ会ってなくて、写真でしか知らないんだけど、今週末に来る予定なの。それで、あなたの車で彼女を拾って、一緒に連れてきてもらえないかしら」

「なるほどね」と言ってから、クレアは少しの間、黙り込んだ。「いいわ。ところでファニー、私がパーティーに来るとか、特別に会いたがっていると聞いたことを、ポールターに話したの？」

「全然」

「じゃあ、気が進まなかったなら、こちらから話しかけなくても大丈夫なのね？」

「一言もしゃべらなくなつて構わないわ」

「よかつた。で、相手の女性っていうのは誰なの？」

「名前は、ローラ・グリーンスレイド。ジャーナリストよ。いろいろ扱つてるけど、主に、あちこちの新聞に科学関連の記事を書いてるんですって。バジルによれば、全体的に見て、なかなかの出来だそうよ。奇遇にも、昔バジルが教えた学生だったの。彼、名前を聞いてすぐに思い出したわ。まあ、彼女にまつわる何か奇妙な点があつたはずだつてこと以外、詳しいことはあまり覚えてなかつただけど。そもそもバジルつたら、その人が自分のおばあさんを殺したつていうのと、耳を自由に動かせるつていうのを聞いたとしたら、耳のほうに興味を持つような人でしょ。でも、私が何よりも奇妙だと思ふのは、彼女がキットと結婚したがつてることだわ。写真で見る分には並外れて美人だし、頭がよくて、高収入ときてるのよ。どれを取つても、キットとは正反対でしょう」

「婚約に不安を抱えているみたいに聞こえるけれど、そうなの？」と、クレアが尋ねた。

「あら、そんなことないわよ。本当に、心から喜んでるわ」と、ファニーは答えた。「キットも、そ

ろそろ結婚したほうがいい年ですもの。だから、家を改築して、二世帯住宅にしたらどうかって考えてるところなの。幸い、以前は二つの家だった物件だから、分けるのは難しくないし。ただ、半分に分けると、彼らには少し狭いかもしれないっていうのだけが気がかりでね。娘が一人いるから。ローラは、前に結婚してたのよ。ご主人が戦死して、子供は自分の母親に預けてるらしいんだけど、再婚してきちんとした家に住むとなれば、当然引き取りたいと思うでしょうからね」

「なるほどね」

「何なの、その『なるほどね』っていう言い方」と、ファニーが不満げに言い返した。

「どんな言い方だった？」

「何だか、奥歯にももの挟まったような感じ」

「決して、そんなつもりじゃないのよ。ただ、どうもまだ、あなたが不安そうに思えて」

「そりゃあ、落ち着かない気分だわよ。それもあって、あなたにぜひ来てもらいたいの。確かに人見知りかもしれないけど、あなたって、妙に人を見る目を持つてるじゃない。彼女を乗せて連れてきてくれる間に、どんな人間なのかわかるかもしれないと思って」

「私やあなたが彼女のことをどう思うかで、何か変わるの？」

ファニーは、やや強しぐさで煙草を灰皿に押しつけた。

「もちろん、何も変わりゃしないわ。それでも、あなたがどう思うか知りたいのよ。それって、当たり前じゃない？」

「何時にそっちへ着けばいいの？」と、クレアは尋ねた。

「土曜日のランチに間に合うように来られる？……よかった。じゃあ、一時頃来てちょうだい。そ

れと、ポールターさんに会う件は、心配しなくても大丈夫よ。すごく温和なご老人だから。とても、新聞社を何社も持っていた人とは思えないわ」

ファニーは電話を切った。これを吉兆と捉えた猫のマーティンが、再度ファニーの膝に跳び乗り、今度はそのままいさせてもらえた。ファニーの片手が、毛並みのよいマーティンの背中をゆつくりと撫で始め、さつきまで煙草を持っていたほうの手は、無意識のうちに使い古しの封筒に四角や丸を描いている。そしてすぐに、何やらメモを書きだした。「スタッフトオリブ(詰め物をし、たオリブ)、塩味アーモンド、チーズストロー(粉チーズを生地に混ぜて、焼いた棒状のパイ菓子)、ソーセージ、アンチョビ、ビスケット、ロブスター……」

そこまで書くと手を止め、今書いたメモをじつと見つめたかと思うと「ロブスター」の下に何度か線を引いた。

そのとき、ふいにドアが開いて、ファニーは作業を中断された。部屋に入ってきたのは、腹違いの弟、キット・レイヴンだった。

キットは、ファニーより二十歳年下だ。ずいぶん前に他界した彼の母親は、二十三歳の若さでファニーの父と結婚したのだった。ちよつと鈍いところのある、気のいい女性で、いつもファニーに好意を持って接してくれたが、最初の結婚をする前あたりからのファニーの生活が、奔放で秩序に欠けていると感じていたらしく、絶えず心配そうな顔をしていた。彼女が、年の離れた夫の死からわずか二年後に亡くなったとき、継母がいなくなったことに対する悲しみの強さに、ファニーは自分でも驚いたくらいだった。近頃では、もしクリスティーンが生きていて、バジル・ライナムとの再婚で自分がどれだけ変わったかを知ったなら大喜びするだろうと、苦笑いしながら人に話すことがある。再婚を機にファニーは舞台を降り、田舎に住んですっかり太り、犬と猫を飼い、アンティークを売り、婦人

会に参加するようになっていた。それこそ、クリスティーンが見たら、わが目を疑うに違いない暮らしぶりだった。

キット・レイヴンは三十歳、中背のがっしりした、肩幅の広い若者で、筋肉質の長い腕と、大きく厚みのある、職人のような手をしていて。髪はイエローブロンド、目は朗らかなブルーで、皮膚は血色がいい。肉づきのよい頬としっかりした顎は姉譲りで、そのうちに姉同様、体重が増えていきそうな感じはあるが、今のところ、まだウエストは細く、足どりも軽やかだ。顔には人柄のよさがにじみ出ており、常識とユーモアを感じさせる表情をしている。ただ、ほんの時たま、その青い目に、当惑と自己不信の色が浮かぶ瞬間があった。美男子ではないにしても、何年も前からファニーが思っているとおりに、女性にかなりもてるタイプだった。

「やあ」と言って、キットはファニーの座る椅子の肘掛けから、姉が書いていたメモを取り上げて目を通した。「パーティーの計画を立ててるのかい?」

「そうよ。あんたが今朝、注文してくれるかもしれないと思ったから」

「そんな時間はないよ。例のチエドベリーでの販売に行かなくちゃならないんだ」

「こんなの、ほんの数分でできるじゃない」

キットは、家事に関わるのが大嫌いだった。

「どのくらい欲しいのか書いてないじゃないか」と、反論する。「これじゃあ、何を頼んでいいか全然わからない。それに、ロブスターだけど、いつものロブスター何と違ってやつを作るんだろ? 生が欲しいの? それとも缶詰?」

「もちろん、生のやつよ」

「缶詰じゃないロブスターなんて、どうやって買うのか知らないよ」と言つて、キットは封筒を突き返した。「そんなに急がなくなつていいじゃないか。まだ三、四日あるんだし。誰が来るの？」

「ポールターさんよ」

「それは知つてるよ。で、クレアは？」

「来るわ。本当に段取りしたつて言つたら、ちよつと腰が引けたみたいだったけど」

「何でクレアは、そんなにポールターに会いたいんだらうね」キットは、好奇心を隠さなかつた。「彼が持つていた新聞社の一つで、記事でも書かせてもらおうつていう腹なのかな」

「まさか！ クレアは、自分の風変わりな家族にまつわる物語しか書かないの。同じ話を何度も繰り返し書いていて、そのたびに、どんどん深くて優れたものになつてるわ」

「だけど、金銭面では苦しいんじゃないかな」と、キットが言う。「著作では、そんなに稼げないだらう」

「思ったよりは売れてるのよ。そんなことはないと思うけど、万が一、お金に困つてるとしても、彼女の場合、ジャーナリズムの道を考えるくらいなら、その前に海かどこかに身を投げるでしょうよ」

「じゃあ、どうしてポールターに会いたがるんだらう」

「クレアの考えることは、誰にもわからないわ。とにかく、午前中にローラを拾つて連れてきてくれることになつたから、手紙で知らせておいてちょうだい」

「わかつた。ほかには誰を誘つたの？」

「まだ、誰も。もちろん、グレゴリー夫妻は誘うつもり。それとやっぱり、マクレーン夫妻でしょうね。あとは——モーデュカしら」最後の名前のところで、ファニーは一瞬言いよどんだ。

キットが、わずかに顔をしかめた。

「モーデュなんか呼んだら、誰も来やしないぜ」

「わかってるわよ。だから、悩んでるんじゃない。でも、呼ばないわけにはいかないでしょう？」ファニーの視線が、スイセンの黄色いラップのような花びらが影を落としている、ローラ・グリーンスレイドの写真に舞い戻った。相変わらず、膝の上に丸まった猫のしなやかな体を撫で続けている。「ほかのみんなは我慢できないかもしれないけど、私は、あの人が嫌いじゃないのよ。ミニーのことも好きだし。それに、スーザン——あの子のことは、とても好きよ」

「ミニーは、おそろしく悲観的で、自分を哀れみっぱなしなんだ」と、キットが言った。「どうしても、あの人たちを呼ばなければならぬのかい？」

「誘わなかったら、ミニーがひどく傷つくわ。スーザンもね」

「もういいよ！」キットは、ドアに向かった。「姉さんがいいと思うようにすればいいさ」

「キット——」ファニーが慌てて呼び止めた。

振り向きはしなかったが、キットは足を止めた。広い肩をやや丸め、太めの首を肩の間に埋めたようにしている。それは、頑かたくなに自分を防御しようとする人の姿勢だった。

ファニーが切りだした。「あなたが彼らを呼んでほしくないのは、トムとミニーのせいじゃないんですし？」

「言ってるじゃないか」と、キットが不機嫌な声で言った。「思うとおりにしなよ」

「一応、招待の連絡をしてみても、あの人たちに事情を話したら——」

「何を話すっていうんだ」言葉を探して口をつぐんだファニーに、キットが詰問した。

「だからその、ポールター家の人とか、クレアやローラなんか来るってことを伝えたら、招待を受けるかどうかは自分たちで決めるでしょうし、そうすれば少なくとも、ほかのみんなみたいに私まで彼らと縁を切りたがってるって、ミニーが思い込むことだけはないと思うの」

「ポールターが来るなんてトムが知ったら、喜んでやって来て、すぐさま喧嘩けんかを吹っかけるに決まってるさ。でも、姉さんの好きにすればいい。僕にはどうでもいいことだ」

キットは、部屋を出て行った。

指で髪の毛をかき上げて深いため息をつくとき、ファニーは再び電話に手を伸ばした。

まず隣に住むグレゴリー家にかけてみたが、ジーンもコリンも留守だった。次に、地元の医師の妻、マクリン夫人にかけた。夫人は、キットのフィアンセにぜひ会いたいと言い、ここ二日間の晴天のおかげで開花した自分の庭の花々について、二十分ほど話し込んだ。マクリン夫人は村いちばんのガーデニング好きで、一度その話を始めたなら何時間でもしゃべり続ける人だが、今回は、どうにか電話を切ってくれた。ファニーは、いかにも渋々といった様子で、モーデュ家の番号をダイヤルした。電話口には、ミニーが出た。ファニーの予想どおりだ。この時間、娘のスーザンはいつも仕事に出ていたし、トムは、いつかけようと受話器を取るとは決してなく、ベルの音がうるさいと怒鳴るだけだった。ミニーが伝言を間違えたりすると、彼女にもさんざん悪態をつくのだった。

トムは教師を引退し、しがたない年金をもらって、村から三マイルほど外れにある小さな田舎家に住んでいる。衣食住についてはきわめて不便で、人並み外れた体力を持ちながらも心はひどく疲れきっている、ボサボサ頭で悲しげな目をした妻のミニーが、家のことをすべてこなしていた。夫の手助けは一切なく、薪を割るのも石炭を運ぶのも、全部一人でやる。口ではしょっちゅうこぼしているくせ

に、内心では当たり前のことと思っているらしく、大学講師で、彼女の目には夫のトムよりも明らかに知性に富んで見えるバジル・ライナムが、洗いや買物、時には料理までするのを見て、妻としてファニーは非難に値し、夫の愛情を失っても仕方がないと思っっている節があった。それでも、ファニーに対しては好意を抱えており、ファニーのほうもここ何年か、口論好きなトムを面白がる態度を保っていたので、ミニーの友人としてトムから認めてもらえていた。

だが今日は、土曜日のカクテルパーティーへのファニーの誘いに、ミニーは言葉を濁した。トムと、それから、もちろんスーザンにも相談しなければ返事ができないというのだ。

予期してはいたことだったが、このミニーの対応に、ファニーは暗い気分陥った。げんなりとした口調で、来られないとしても、それは仕方がないと言った。

ミニーは、その言葉にほっとしたようだった。

「わかってくれると思ったわ。説明しなくても察してもらえるのって、ありがたいわよね。たぶん伺えるとは思うんだけど。私は、ぜひとも行きたいのよ。でも、スーザンがどう思うか……ほら、あなたも知っているとおり、あの子はとも引つ込み思案で、本当は今どう感じているのかわからないの。といって、無理強いするのは嫌だし……ね、わかるでしょう？ だから、口出ししたくないのよ。お相手の、そのミス・グリーンズレイドって方——」

「ミセス・グリーンズレイドよ」と、ファニーが訂正した。「未亡人なの」

「とにかく、そのグリーンズレイドさんって方のことを、あなたは気に入っているのよね？ キットは、その人と結婚して本当に幸せになれると思う？」

「私は、まだ会ってないの。少なくとも、キットは、彼女をとても愛してるみたいだわ」

「そう、ならよかった」ミニーの声は、やや震えていた。「結婚すれば、彼もしっかりした人間になるでしょう。ご招待くださって、ありがとう。トムと相談してから、もちろんスーザンともだけども、伺えるかどうか、あらためてお電話するわ。キットによろしくね。三人とも、彼の幸福を心から祈っているって伝えてちょうだい」

ファニーは受話器を置き、もう一度、部屋の向こう側にあるローラ・グリーンスレイドの写真をしげしげと見つめた。

確かに美人だわ、と彼女は思った。それに、知性が感じられる——でも、ほかには？

猫を膝から追いやって立ち上がると、パーティーに必要な品をメモした封筒をポケットに入れて、ドアへ向かった。

廊下のフックから古いコートを取り、スリッパを脱ぎ捨ててゴム長靴に足を突っ込んだ。そして、廊下の先にある店を抜けて外へ出ると、店のドアを離したその手で、素早くドアに掛かっている札を裏返した。外から見ると「すぐに戻ります」と書かれている。

封筒に書いた品のほとんどは今すぐ注文しなくても構わないのだが、ミニーと話してみても、言いたいと思っていたことの半分も言えなかったせいで、落ち着かない気分になってしまったのだ。それに、野菜と魚を商っているハリスに、ロブスターのことを訊いてみるのもいいかもしれない。